明るさの錯視と色の錯視

北岡明佳

明るさの錯視と色の錯視は兄弟のようなものである。何と言っても品揃えが似ている。例えば、明るさの対比があれば色の対比があり、明るさの同化があれば色の同化があるといった具合である。

一方、種類によっては、明るさの錯視はあるが、それに対応する色の錯視がないことがある。その逆もないわけではないが、おおむね明るさの錯視が兄で、色の錯視は弟といったところである。

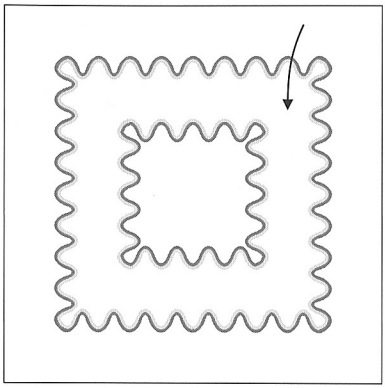
視覚のメカニズムとしては、色の情報は明るさ（輝度）の情報に随伴して処理されるという考え方がある。この考え方に従えば、明るさの錯視と色の錯視の兄弟関係も理解しやすい。

ところが、最近になって、兄弟喧嘩をしていると思われる錯視が注目されている。イタリアの視覚研究者ピンナ（Baingio Pinna）らが二〇〇一年に発表した水彩効果（watercolor effect）である。

図は水彩効果のうち、明るさの錯視を示したものである。濃い灰色と薄い灰色の二重の波線に縁取られた正方形状の回廊部分（矢印）がベールに覆われたように白っぽく見える。白く見えると言っても、透明視が成立してそう見えるだけのようで、分析的に見れば、回廊部分はそれ以外の部分よりも暗く見えている。波線は回廊部分側が明るいので、この明るさの誘導は「対比」である。

ところが、色の場合は反対なのだ。ここでは示すことができないが、回廊側の波線を明るい橙にして、回廊の外側を暗い紫にすると、回廊部分が橙色の水彩絵具で塗られたように見える。つまり、色の誘導は「同化」である。興味深い不一致である。

（きたおか・あきよし　知覚心理学）



水彩効果が回廊部分（矢印）に起きている。